

翻訳 リディア・マリア・チャイルド 「仏教とローマ・カトリックの類似性」

田 中 泰 賢

訳者前書き

リディア・マリア・チャイルド (Lydia Maria Child, 1802-1880)¹⁾は1870年、68歳の時にエッセイ「仏教徒の宗教とカトリックの宗教の類似点」を『アトランティック・マンスリー』誌に書いている²⁾。これは彼女が亡くなる10年前であった。1870年という時代はアメリカで中国人排斥の運動が起き、中国人移民禁止法が1882年に成立している。そのような時代にチャイルドがこのエッセイの中で中国人も含めた仏教について書いているのはすごく勇気のいることであつたろう。そして円熟した年齢の時に仏教について書いていることは仏教への理解がかなり進んでいたと思われる。

リディア・マリア・チャイルドは18歳の時、兄のコンバース・フランシスに「私の感情と知性が一体となるような宗教を見いだしたい」と手紙を書いている。(A Lydia Maria Child Reader, p. 415) はたして彼女はそのような宗教に巡り合えたであろうか。1876年、74歳の時、自由宗教協会 (Free Religious Association) の会合に出席している。「この協会は1867年に設立され、エマソン (Ralph Emerson) はボストンでの最初の会合で演説を行っている。多くの超絶主義者がこの協会に関わっている。」(The Oxford Book of Transcendentalism, p. 67)。エマ

ソンを中心とする超絶主義者たちが発行していた季刊誌『ダイアル』(Dial, 1844年1月)に「仏陀の教え」というエッセイが掲載されている³⁾。このように自由宗教協会に関わっていた人たちには仏教にも関心を持っていた側面がうかがわれる。

彼女がこのようなエッセイを書いたことと、自由宗教協会⁴⁾に足を踏み入れたことは矛盾しないであろう。

このエッセイは今から141年ほど前に書かれている。従って現代から見た訳し方が適切であるか、また内容的にも学問的に疑問点があるかもしれない。諸賢からのご意見等がありましたら光栄です。

本 文

労働の独占権を規定しようとする人々は中国人を異教徒としてあざ笑うことに慣れている。彼らは市民権を中国人に与えるべきではないと強く主張している。その理由は中国人の宗教が私たちの宗教と異なるからという。けれどもこんな風に論じる人々は(ローマ・カトリックの)アイルランド人の移民を受け入れたり、アイルランド人に任意の商品販売権を与えることに反対はしない。私たちの(プロテスタントの)慣習や考え方、信じ方がローマ・カトリック教と異質である以上に中国で流布している仏教は私たちと異質であろうか。実際は両者において多くの著しい類似点があり、いくつかの事項においては対応するものが非常に酷似しているので、その名前を除けば違いに気づくのは難しい。いくつかの最も明らかな類似点を指摘してこの発表の正しいことを裏付けたい。

釈迦牟尼仏は畏敬する釈迦或いは聖なる釈迦を意味する。キリスト教徒がイエス・キリストを崇めるように仏陀もまた多くの信奉者たちによって崇敬されている。仏陀の誕生日ははっきりしない。国によって異なる。モンゴルの記録によると紀元前2134年前に仏陀は誕生されたという。しかし中国の記録によると紀元前1029年であるという。ウィリアム・ジョーンズ及び他の東洋研究者たちはこの問題を調べ

て、仏陀は紀元前千年頃に誕生されたという十分な証拠を発見したと考えている。

インドの三大神はブラフマン(梵天)、ヴィシュヌ及びシヴァからなる。しばしば一つの体に三つの頭を持った像で表わされる。民衆はこれらを別々の神々として崇める。しかしもっと理知的な人々は次のように述べている。「唯一の造物主、存在の究極の源のみである。その方は眼に見えず、無限であり、計り知れない。ブラフマンは創造し、ヴィシュヌは守り、シヴァは破壊するという。しかしこれら全ての表現は唯一の至高の存在のみを示している。」

釈迦牟尼仏はヴィシュヌ神の顕現であると信じられている。仏陀のこの世への出現は次のように語られている。「仏陀はいつでもどこにも存在し、尽きることなく瞑想しておられる。最高の方であり、不動の方であり、礼賛するにふさわしい、神々しい方である。仏陀は非常にすぐれた天性を備えてこの人間界にあらわれた。」彼は王家に生まれた。彼の母親はマヤという名前のバージンであり、光線によって身ごもったと言われている。彼の誕生は不思議な夢によって予言された。彼が誕生した時、輝かしい光があたり一面をさした。はるか遠く離れた森にすむ聖者はヴィシュヌ神が人間の形をしてあらわれたという超自然的な情報を霊受した。聖者はその宮殿に飛んでいき、「私は新しくお生まれになったお子様に会いに参りました。」と語った。聖者はその赤子を見るとすぐに、その赤子はヴィシュヌ神の化身であり、世界に新しい宗教を広める方であると宣言した。

仏典によると彼が歓喜の天界を去り、この地上に降り立ったのは人類の罪と苦しみへの哀れみに満ち溢れていたからという。あらゆる罪は定められた苦しみの度合いによって償わなければならないという神聖な法があるので、彼は王子の位を捨て、全ての世俗の慰みを断ち、難行苦行を経験した。それによって彼は人間の罪をあがなったのである。彼は非常に慈悲深かったので、地獄にも降りて行って、罪人たちに説き教え、彼自身の苦行によって罪人たちの罪の期間を短くしたの

である。

彼の完全な靈的生活によって死することなく天界へ昇ることができたのである。多くの国々の岩には彼の言葉や行いの記録が碑文となつて、また彫像の形で残されている。いくつかの場所において、腫て蛇を押しつぶしている彼の姿が描かれている。多くの敬称が彼に授けられている。例えば「釈迦族のライオン」、「この世の王」、「マーヤーの息子」、「慈悲の薬師」である。しかし彼の最も知られている称号は「世界の救済者」である。仏教の経典は彼を「未来永劫において至高の存在者」として、また「三つの姿をした一つの実体」として述べている。彼は究極なる存在者であるので、彼の名前を唱えて祈りが捧げられる時、信者たちは彼ら自身が極楽へ行けること及び彼と一体となることを期待する。彼が再び地上に降りて人類に秩序と幸福をもたらすことを信じている。

ヒンズー教信徒はもっぱら自分たちこそ神の真理の啓示を授かるのだと信じている。彼らは外国人が宗教上不浄であるとみなして、コミュニケーションはしなかった。なぜならば外国人はヒンズー教の儀式に従って洗い清めていないからである。ヒンズー教徒の聖典の制度は社会を四つのカーストに分け、より高いカーストの人々はより低いカーストの人々と交われば汚れるとした。釈迦牟尼仏は祖国の大部分の宗教的教義、儀式、慣習には準拠した。しかし釈迦はいくつかの重要な改革を導入しようとした。もっとも大きな社会運動はカーストの制度を廃止することであった。

釈迦牟尼仏から何世紀も前の時代には次のようなことは一般的であった。すなわちヒンズー教徒は世間から引退すると森の奥に住んだ。そして絶え間なく祈りに専念し、様々な難行苦行をおこなった。それは神と一体となるための定められた方法であった。それは他の全てに優先する目標であった。このような苦行者たちは(そのような苦行の)知識と神々しさによって大きな評判を得たので奇跡を行なえる、神感を持つ教師としてみなされた。若者たちは教えてもらうため

に苦行者に集団で群れをなした。そしてこのようにして宗教的コミュニティが森の中で成長していった。厳粛な沈黙が祈りと聖歌で満たされた。

女性たちはこの聖人のような生活に専念することは許されなかった。外国人たちだけでなく、より低いカーストの人々もこれら宗教的教えから締め出された。しかし釈迦牟尼仏はこのような狭い制限を退けた。(つまり女性も外国人も低いカーストの人々も参加できると釈迦は宣言した。) 仏陀は「神と一体になる道は世界の人々、国内の人々、外国の人々、身分の高い人々、身分の低い人々、男性、女性、全ての人々に開かれている」と示した。これは彼の教えの一つとして次のように記録されている。すなわち「全ての人々は平等である。そして私の教えは全ての人類への一つの贈り物である。」

バラモンと呼ばれた聖職位にいるカーストの人々は釈迦牟尼仏のこのような宣言を軽蔑した。彼らは仏陀を嘲って「仏陀や彼の弟子たちは身分の低い人々、犯罪者たちに教えを説いており、最も邪悪にも身分の低い人々、犯罪者たちを気品のある人々であると位置づけている」と罵った。新しい非正統派(仏陀の教え)が広がるにつれて、その革新はバラモンの教会のプライドを害するのみならず、バラモンの利己主義に警報を発した。もし全ての人が正義の教師になることが許されるなら、世襲の聖職者、バラモンは必然の結果として彼らの威信が低下し、収入が減ると考えた。

したがって(仏教への)迫害が次第に激しくなっていた。たくさん人の仏教徒が死に追いやられた。仏教徒は終にインドから完全に追い払われていった。インドでは仏教は何世紀もの間、廃れた状態になっている。しかし迫害は仏教徒を燃え立たせ、彼らの種々の教義への熱情が増大していった。そして仏教徒はあらゆる地域で教えを説いていった。8万人の仏教徒がインドから他の国々に布教者として前進していったといわれている。彼らの種々の教義は平和にそして静かに広まっていった。しかもそれは驚くほどの速さであった。仏教は今日で

は中国、日本、チベット、セイロン（スリランカ）、ビルマ帝国（ミャンマー）、タタール地域の大部分（東欧からアジアにわたる地域）に広く行き渡っている。その信奉者は4億人と見積もられている。それは人類の3分の1以上になる。仏陀・釈迦の誕生は多くの国々にとって重要な出来事としてみなされている。あらゆる場所において仏陀の教えに従う人々はインドを聖なる国と考えている。多くの信奉者はインドのベナレス（バラナシ）に聖地詣でに出かける。（仏陀が最初に説法した都市）ベナレスを特に聖なる都としている。

数千年前にインドの隠者及び聖者の集団は森に住んでいた。彼らは数珠玉の力を借りて多くの祈りの儀式をやり通すことに慣れていた。仏教徒もこの古代の習慣をそのまま行っていた。巡礼者は、ひっきりなしに祈りを繰り返しながら、ベナレスへ向かった。その途中必ず他の巡礼者に出会った。巡礼者は巡礼の間、指で数珠玉を回し続けた。それは丁度カトリックの巡礼者がイェルサレムやローマに行く途中、ロザリオ（数珠の一種）の助けを借りて信仰を行うのと似ている。

釈迦牟尼仏が誕生する数世紀前には、個々人の罪業は苦しみの厳格な配分によって償われ、その（罪業）結果は定められた多くの祈りによって転じられ、或いは減じられるのはヒンズー教徒の主な教義の一つであった。代理人をたててこれらの苦行が引き受けられ、これらの祈りが有効に繰り返されると信じられていた。それだから、もし人が自分自身の罪業の償いのために必要以上により多くの苦行を自身に負わせ、より多くの祈りを朗唱すれば、余剰分によって故人となった親戚や友人たちの面目が施され、それによって刑罰の期間が短縮されるかもしれない。祈りは代願者の靈性に依りて効果があると考えられたので、死者のために祈りを朗唱してくれるヒンズー教の僧侶に報酬を支払うのが一般的なきたりになった。苦しみから精霊を助けるやりかたはローマ・カトリックだけでなく仏教の僧団に大きな恩恵をもたらしている。

仏教徒たちは多数の聖者を崇めている。聖者たちは偉大なる靈性によって釈迦牟尼仏と一になり、奇跡を行う力を得ている。聖者たちの大きな聖像は寺院に多く安置され、小さな聖像は種々の儀式や祈りの儀式を行う僧侶たちによって崇められている。これらの聖像は人々に大量に売られる。人々はそれをお守りとして身につける。人々はそれが妖術や邪悪の類から防護してくれると信じている。ローマ・カトリックの聖職者も同様に十字架、聖母マリア及び多くの聖者の像の販売から多くの収入を得ている。人々はそういったものが危険から守ってくれるものであり、非常の場合には人々を助けてくれる不思議なほどの力を備えていると信じている。アニュス・デイと呼ばれる神の子羊の小さな像をカトリックの国々のほとんどいたるところで小作農の人々は身につけている。聖職者によって行われる聖なる儀式は自分たちを悪霊から守ってくれると人々は確信している。

日本ではほとんどすべての山（高い山から低い山まで）及び崖は仏教の聖者のある人たちにとって聖なるものである。彼らに対して旅人が祈りをあげることが懇願される。ヨーロッパのカトリック教徒の住むあらゆる道端に聖母マリアと聖者の像が安置されている。その碑文には旅人が祈りを唱えて、供え物を祭壇にささげるようにと記されている。

全ての仏教徒の家にはある聖者の像が祭られている。人々は祭っている聖者に豊作、健康な子供たち、順調な旅、そして人々が願う様々な幸運を祈る。もし人々が願ったことが叶えられない場合、その不運な像を打ち、罵声を浴びせることがある。カトリック教徒の人々も似たようなとりなしを彼らの家に安置している聖者の像や絵にする。もし彼らの祈りが実を結ばない時、しばしば聖者の絵を裏返しにしたり、或いはその像に対して「報われない、役立たず！ 毎日私はあなたに祈りをして、供え物をしているのに、あなたは私に何もしてくれない。」と罵って、打ったりする。

仏教僧は聖者の多くの遺品を見せる。これらはその聖者自身が存命

中に有していた不可思議な力と同じものを持っていると信じられている。最も名高い遺品を持っているお寺は最大数の巡礼者をひきつける。巡礼者の供え物は大きな富の源泉になる。その中でも最も裕福なお寺がセイロン（現在のスリランカ）にある。そのお寺には釈迦牟尼仏の歯が保存されている。それは多くの驚くべき奇跡を起こしているといわれている。それは四つの金の箱の中にまつられており、まわりは高価な宝石がちりばめられている。巡礼者の大群はそこへひんぱんに出かけて行き、肉体が継承するすべての病気が治癒されることを希望するのである。

ローマ・カトリックの教会も類似した聖なる遺品がたくさんある。奇跡的な力はその御蔭によるものとみなされている。イエスが磔（はりつけ）にされた十字架は三世紀あとにカルガリの丘で掘り起こされたといわれている。金のはめ込まれ、高価な宝石で装飾された小さな木片を人々はしきりに買い求めて、身につける。それは危険やあらゆる悪をさそうものから守ってくれるのである。需要が大変多いのでそれに応じることが出来なかった。その聖なる木片は奇跡的な力を備えていて、それが減少するとたちまち再現することを牧師たちは気がつかなかった。そのかなりの量は現存している。サンドニという町には二つの頭蓋骨と並んで、二つの完全な骸骨がある。異なった場所に陳列されて、夫々が本物であるというローマ教皇の証明書を持っている。

聖母マリアの髪の毛の実例が幾つかの教会に祭られている。そのあるものは淡黄褐色、あるものは褐色、あるものは赤、あるものは黒である。聖母マリアが住んでいた家は夜に天使によってイタリアのロレットに運ばれたと言われている。そこには素晴らしい教会が建てられている。何千という巡礼者はそこに行き、幾分高価な供え物をささげる。小さなジョッキの中にロザリオを入れる恩典のために。そのジョッキから飲み物を幼子イエスが飲んでいたということになっている。書物にはカトリックの遺品とそれらの奇跡が行われたという物語

で満ち溢れている。

中国のどの家にも祭壇がある。そこには聖人の碑文と像が飾られている。その祭壇の前で家族の人たちはひざまずいて祈りをあげる。カトリックの人たちも像の前で同じようにする。カトリックの人たちは一般に住居のある場所にそれを設ける。中国の家の祭壇での最も一般的な像は神母の像である。それは母なる女神を意味する。それは手には赤ちゃんを抱いて、頭の周りには光輪がさしている女性を表している。伝説では彼女は水蓮と接触して身ごもった聖処女であり、素晴らしい子供を産んだという。その子供は聖人になり、偉大なる奇跡を行ったという。もし中国人がヨーロッパのカトリックの教会や礼拝堂を訪ね、青や深紅の光り輝く装いで、頭の周りには金色で光る光輪があり、手には幼子イエスを抱いている聖母マリアのたくさんの像を見るなら、中国人はそれを自分たちの神母の肖像と疑いもなく見間違えるかもしれない。仏教国の聖なる像は時々まぶたをあげ、祈りにうなずき、数年のうちに奇跡が起きるといわれている。それと似たようなことが聖母マリアの像によっても起きる。

ガンジス河やその他の聖なる河の水は超自然の属性がしみ込んでいると仏教徒によって思われている。仏教徒は宗教的な目的に使用するためにその水を得るためにはるばる旅をする。カトリック教徒もまたヨルダン川に関して類似した感情を持っている。ヨルダン川から水がフランスの皇太子に洗礼を施すという特別な目的のために運ばれる。仏教僧もまた祈りと儀式で水を聖なるものにして、災いからのお守りとして人々にそれを売る。仏教僧はしばしば招かれて聖水を病人、危篤の人、新婚夫婦が入居する戸口、新しく誕生した赤ちゃんにそそぐ。カトリック教徒もまた水に大きな意義を結びつける。カトリック僧は宗教的儀式によって水を清める。枕元に聖水を置くのは彼らには普通の行為であった。聖水の入った瓶は常に教会の入り口に置かれた。その水に指を浸して、十字を切る。カトリック教の僧はまた小さな散水器でその聖水を信者にふりまく。

仏教徒は寺院で香りのよいお線香を焚く。カトリック教徒も教会で似たように乳香を焚く。チベットでは日暮れが近づくと、男性も女性も子どもたちも僧侶の合図で仕事や遊びをやめて、公共の広場に集まり、跪いてお祈りを唱える。カトリック教徒も晩の鐘で同じようなことをする。

仏教徒は増えるにつれて、もともと礼拝(らいはい)のために使っていた庵は消えて、大きな寺院が現れた。その寺院は壮麗に飾られ、釈迦牟尼仏と聖者の絵画や彫刻で満たされた。これらのほとんどにはアジア式芸術作品特有のグロテスク性がある。しかし釈迦牟尼仏の画像は常に落ち着いて威厳のある表情で、大きくて優しい目、長くてカールした髪の毛を有している。チベットのラサは仏教徒のローマである。そこに建立された寺院は雄大さにおいて他の寺院の上に位する。丁度聖ペテロ大聖堂が他のカトリックの教会の上に位しているように。それは4階建てで、金色の柱に取り囲まれ、金色の板で屋根を葺いた壮麗な建物である。室内は多数の彫刻で飾られ、金色、銀色の聖なる像で満ちている。

チベットの僧はラマと呼ばれる。それは羊飼いを意味する。教皇は大ラマ、或いは偉大なる羊飼いと呼ばれる。彼はラサに住む。ラサの都はもともと仏陀ラ(原文 La ママ)或いは聖者ラ(原文 La ママ)の出現によって聖なる都になった。仏陀ラ(原文 La ママ)は釈迦牟尼仏を讃えた仏教徒で、聖性が卓越することによって釈迦牟尼仏と一体になった。聖者ラ(原文 La ママ)の魂はきちんと代々の大ラマに伝えられている。大ラマはそれによって直接の継承者になり、永遠の老聖者の目に見える代表者である。このプロセスによって彼は完全で、決して誤らないとされる。彼は全ての人に祝福の言葉を施す力を備えた神の代理人とみなされている。彼が聖典を説明することは神々しい靈感としてみなされる。彼の手を崇拜者の頭に置くと、罪の許しを授けるときにされている。彼が諸寺院に大行列で進む時、王子たちも、乞食たちも一様に平身低頭する。彼が聖なる建物に入る時、随行

する僧たちは裸足で彼に随い、彼に平身低頭する。彼が行う儀式の一つは小さな清められた練り粉を施す。それはお守りとして熱心に求められる。正式な場合には彼は黄色い冠をかぶり、紫のシルクの法衣を着用し、手には十字の形をした長い杖を持つ。

遠い昔から大きな森で禁欲と祈りの生活をしている信者たちが共に建物に集まり始めた時代についての記録は知られていない。しかし僧院(僧堂)に大変類似した教育施設は仏教国において何世紀もの間おびただしくある。ラサだけでもラマ寺と呼ばれる営造物が三千はあると言われている。それらは一般に山や丘の上に建てられ、アジアの中では非常に絵のように美しく、堂々とした建物である。王宮は除いて。それらの寺院のいくつかは聖なる女性たちの尼僧会によって使用されている。このような生活様式を選ぶ人は全て禁欲の誓いをたて、頭をそり、俗名を捨てることによって世間に知られる。子供たちはラマ寺で宗教の儀式や教義を教わり、アジア人が教えなければならないような知識の教育を受ける。病気の人や貧しい人もそこに受け入れられ、親切な世話をしてもらう。ラマ僧の他の役目は祈りを暗誦し、儀式を行う。それによって死者の罰を短くし、生きている人を悪霊の災いから守る。ラマ僧はまた仏像やお守りを清め、聖なる水を散布し、葉草を集めて葉を調合し、果物を貯蔵する。ラマ僧は聖典から抜粋を細心の注意をはらって書き、しばしば美しく明るい色の書物にして販売する。

多くの金持ちたちは浄土に往生せんがためにラマ寺の建立のために多額のお金を遺贈する。その建立したラマ寺では彼らの精霊のために祈りが唱えられ、病人が看護をうけ、貧しい人々が救済され、旅人が暖かいもてなしを受ける。コーチシナ(インドシナの南部にあった旧フランス植民地; 1949年以降ベトナムの一部)へのイエズス会の宣教師、ボリは「それはまるでカトリック教会の中で悪魔が異教徒の宗教的儀式の美と異種を表そうと努めているかのようである。ラマ僧たちは首のまわりに数珠をかけている。ラマ僧には(カトリックの)司

教、大修道院長、大司教と似た僧がいる。ラマ僧はカトリックの司教杖と似ていなくもない金色の棒を用いる。もし誰でも新しくこの国に来れば、そこが以前はクリスチャンがいたところであるといとも簡単に思いこまされるほどに悪魔はカトリックを真似ようとしている。」と述べている。

フランスのイエズス会の宣教師、フーク霊父はそれほど以前でない時ラマ寺の一つを訪ねている。彼は(カトリックとの)類似性に衝撃を受けて次のように述べている。「私たちが受けた歓迎によってこれらの僧院がまるで私たち自身の宗教的先祖によって建立されたような思いがわき上がってしまった。そのラマ寺では旅人も貧しい人も常に体の回復のための飲食物と魂の慰めを見出している。」その宣教師はラサの統治者にローマ・カトリック教徒になるように説得を試みた時、ラサの統治者は礼儀正しく耳を傾けて聞いたあと「あなたの(カトリックの)宗教は私たち(仏教)と同じですね。」と答えたと私たちに語った。

ラマ僧の中のある僧たちは共同体に住まず、遊行の生活を送り、乞食(托鉢修行)によって暮らしていく。この種類の人たちは中国ではきわめて多く、大変やっかいである。イタリアやスペインの多くの托鉢僧と同様にしばしば不潔である。仏教僧のある僧たちは本当に立派で、知的であるが、ある僧たちは放埒で、不埒で、サンスクリット語の意味について知らずに祈りをくりかえす。それは丁度あるカトリック司祭がラテン語をそら覚えると同じである。

知的なカトリック教徒は様々な儀式に精神的な意義を見出し、無知な大衆の多くの迷信的なしきたりを決して是認しない。仏教徒の中でも悟りを開いた僧たちも事情は同じである。フーク霊父が悪魔に取り付かれた人々から悪魔を追い出す手段として贈り物を要求するラマ僧について話した時、ラマ寺の一人の高僧が「悪魔がお金持ちの人たちに取り付いていることはありうる。しかし高価な贈り物の結果として悪魔が離れていくというのは同胞を犠牲にして富を積もうとする、無

知で、ペテン師的なラマ僧の作りごとである。」と答えた。ラサの統治者はその宣教師に「タタル地方およびチベットにおいて非難される多くのことを見たり、聞いたりしたでしょう。しかし無知なラマ僧によってもたらされた多くの間違いや迷信は正しく学んだ仏教徒によって拒絶されていることを忘れてはならないでしょう。」と述べた。

注

- 1) チャイルドはアメリカ人の奴隷問題や児童文学作品のみならず、アメリカ先住民問題についても数多く書いている。牧野有通氏はアメリカ先住民関係のチャイルドの著作5篇を日本語に翻訳され、『孤独なインディアン』と題して2000年に出版している。牧野氏は「インディアン問題は単純な人種問題ではない。そこには常にチャイルドが批判する、黒人や女性を抑圧してきた「白人父権主義」のイデオロギーと根深く関わるものがある。のみならず第二次世界大戦中の日系人強制収容にもつながる問題ともなりうる。それゆえチャイルドの作品を再評価すること自体が、アメリカという歴史的、地理的現実を「正当化」してきた国家の根底を再検証することにつながるようにおもわれるのである。」(牧野有通「訳者解説」『孤独なインディアン』 pp. 190-191) と述べている。
- 2) 『アトランティック・マンスリー』26 (1870年、12月)。このエッセイは2004年に発行された *Buddhism in the United States, 1840-1925 Volume 1* (Genesha Publishing / Edition Synapse) にも収められている。
- 3) これについては拙論を参照 (愛知学院大学禅研究所紀要、第37号、2009年)。またこの自由宗教協会に関わっていたトマス・ウエントワース・ヒギンソン (Thomas Wentworth Higginson) は1871年に「仏教経典 法句経」を、及び1872年に「仏陀の特性」を発表している。前者は拙論 (愛知学院大学教養部紀要、第52巻第4号、2005年)、後者は拙論 (愛知学院大学教養部紀要、第52巻第1号、2004年) 参照。
- 4) 日野淑子氏によるとチャイルドは「女性」としてよりも“自由”な“個人”として生きることのほうが重要であった。略。宗教的セクトに対しても、その“自由”をもって反発している。」(p. 67)

引用文献

[一次資料]

Child, Lydia Maria. “Resemblances between the Buddhist and the Roman Catholic Religions” *Atlantic Monthly* 26 (Dec. 1870): 660-5.

[二次資料]

日野淑子「リディア・マリア・チャイルドにおける娘の教育と〈母〉」『東京大学教育学部紀要』第34巻、1994：61-69.

Karcher, Carolyn L, ed. *Lydia Maria Child Reader*. Durham: Duke UP, 1997.

Myerson, Joel., Sandra Harbert Petrulionis, and Laura Dassow Walls, eds. *The Oxford Handbook of Transcendentalism*. Oxford: Oxford UP, 2010.

チャイルド、リディア・マリア『孤独なインディアン』牧野有通訳、本の友社、2000.

参考文献

イーストバーン、ジェイムズ・ウォリス、ロバート・チャールズ・サンズ『ヤモイデン——もうひとつのフィリッパ王戦争』中村正廣訳、名古屋：中部日本教育文化会、2010.

Karcher, Carolyn L., ed. and with an Introduction. *Hobomok and other writings on Indians* by Lydia Maria Child. New Brunswick: Rutgers UP, 2009.

Karcher, Carolyn L. *The First Woman in the Republic: A Cultural Biography of Lydia Maria Child*. Durham: Duke UP, 1994.

黛道子「異人種間にみる社会改革への試み——リディア・マリア・チャイルド『ホボモック』」野口啓子・山口ヨシ子編著『アメリカ文学にみる女性改革者たち』東京：彩流社、2010.

大串尚代『ハイブリッド・ロマンス——アメリカ文学にみる捕囚と混淆の伝統』東京：松柏社、2002.

Wells, Anna Mary. *Dear Preceptor: The Life and Times of Thomas Wentworth Higginson*. Boston: Houghton, 1963.